

文温の絆 先人の叡智に学ぶ

第24回 堀内さんと愉しむ四字熟語

「哲人其萎」
てつじんきい



文・写真:堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

孔子の杏壇での講学の様子

『論語』巻頭の学而篇は「子曰く、
学びて時に之を習う・・・」と始まる

連載の初回に「聞一知二」（一を聞いて二を知る）という子貢の謙虚なことばをとりあげましたが、最終回のここは「聞一知十」（一を聞いて十を知る）の顔回の出番です。聡明な人への誉めことばとして用いられています。晩年の孔子は、講ずるにせよ著するにせよ顔回の助けを必要としていた



顔廟の復聖顔回像
孔家から100m、陋巷に住みつづけて41歳で師に先立った

のでしょう。顔回に先立たれたとき、老師は「ああ、天はわれを喪ぼせり」と天を仰いで嘆いています。孔子は至聖、顔回は復聖として曲阜の孔廟（孔宅故井がある）から100mほどの顔廟に祀られています。ここはかつての陋巷のあとで（陋巷井がある）、顔回は「一箪一瓢」という粗食に耐えて生涯をすごしています。曲阜を訪れたら正殿の大建築



晩年の孔子は「賢なるかな回や」といって顔回を頼りにした

である大成殿は一瞥にし、双方の井戸の間を歩いてたどること。子弟の会話が聞こえてくるでしょう。



曲阜の孔子故里
尼山聖境に立つ72mの孔子像



曲阜 孔廟の核心大成殿
孔子死後2年目の紀元前478年に魯の哀公が故宅を廟としたことにはじまる

孔子は杏の樹の下で琴を奏し講義をしたと伝えられ、廟内に杏壇が残されています。論語巻頭の「学びて時に之を習う、亦説（よろこ）ばしからずや・・・」はここでの発語とも。時に習うは学んだことを時に実習すること。

『論語』由来でもっともよく知られた四字熟語といえば「温故知新」でしょうか。「故きを温（たず）ねて新しきを知る」と読んで、一方で先人の叡智・古例に学び、一方で現実の動勢を把握する。双方をよく見極めることによってはじめて人の師となれる（以って師と為るべし）と孔子は説く。書齋にこもって過去にのみかかわり現実を知らない、あるいは現実に執着して歴史故事を知らない。→



孔子が琴を奏し講義をしたとされる杏壇

→ いずれも真実の姿をつかむことができず、そういう人物には人を教育したり、世のリーダーとなったりする資格はない。孔子は双方の実践者でした。古きをたずねて現代に活かすと読むのは、書齋派の学者に都合のいい解釈といえそうです。

孔子の去世にかんする四字熟語に「哲人其萎」（てつじんきい）があります。73歳で去世した孔子は亡くなる7日まえに「太山壞（くず）れんか、梁柱摧（くだ）けんか、哲人萎えんか」と詠ったと『史記「孔子世家」』が伝えています。

近代明治期に「philosophy（愛知学）」に「哲学」の字を当てたとき、西周（にしあまね・哲学者）の脳裏にこの「神」ではなく「人間の生」を至上とする哲人の情景が去来していたかどうか。これからの文明論のテーマです。

賢人の逝去を哀悼することばとして「哲人其萎」は今に生きています。



孔林にある孔子墓
「老師」と声をかければ
答えてくれそうな大きさ